

- た直筆の記録全て
- ・ 日本版 SICS の実施の手引きに残された保育者のメモ書き
 - ・ 園内研修及び研修終了後の意見交換会におけるビデオ・オーディオ記録。これらは文字化された。

C. 研究結果

分析の結果、大きく以下の 6 つの知見が得られた。

1. 誰もが一定の手順に乗っ取って保育の質を自己評価する方法を確立する重要性：

「適当な順番で選んだのがまおちゃんだったのですが、彼女を今回観察してみてよかったです。いつも私が観察対象として見てしまう子は、私が何らかの関心を寄せている子ばかりにどうしてもなってしまうので。」（クラス担任 M）

日本版 SICS では、『特定の子どもを指定するのではなく、名簿の順で 3 のつく子とか、〇月生まれの子のように、偶然に決まるようにならせておきましょう』（実施の手引き参照）と書かれている。このように一定の手順を踏むことで、日頃の保育で無意識のうちに生じている保育者自身の偏りを少なくすることができます。

「日本の実践は往々にして直感的に、時に、より情緒的に、分析されたり議論されたりする。」（無藤、2008）

2. 自明のものとされていた側面の見直し：

比較文化研究でよく取り上げられる理論であるが、この研究では保育者が日本版 SICS を用いることで、これまで当たり前の

こととして見つめてきた保育内容、指導形態、子ども理解などを違った視点で捉えなおす姿が見られた。

「私は Form C が勉強になりました。どの領域や側面を評価対象として見なければならないのかが挙げられていました。中には今までに考えたこともなかったような項目があつて実践をこうやってしていくのだなと思えたことが収穫でした。」（クラス担任 I）

Ayers (2001) は、自明の文化を見直すことの重要性を以下のように挙げている。

我々は、深く理解した状態から表面的な理解の状態へ移行しながら自分たちの文化を体験している。（中略）しかし、自分たちの知らない世界に出くわすと、まず、我々はその表層の部分だけを見てしまい、その出来事の深層・真意を理解できずに終わってしまいがちである。このことも、また、文化や人々を見えないものにしてしまっている（p. 76）

3. 保育者の語りの変化：

日本の保育者は、子ども達の発達を社会性において言及することが多い（例えば、他の子ども達とどうかかわっているのか、仲良く遊んでいるのか）。今回、日本版 SICS を通して、子どもの社会性ばかりに目を向けていたのに環境とのかかわりによって変容する予測を立てるような語りに変わった。

4. 批評眼をもって反芻することで得られた新しい視点：

「今回、彼女を観察してみて、自分がいかに子ども達のことを充分に考えていないかに気づいた。特に、彼女は今どんな気持

ちでクラスに要るのだろう、とか、最後までひとりで活動を終えられるような環境を構成するにはどうすればよいのだろう、といった視点がなかったことに気づいた。」（クラス担任 C）

保育者が自分自身の保育実践を今までとは違って観点で語るようになったことが視された。

5. 記録の意義（特に、エピソード記録）：
保育者各自がどのような記録をとったのか、実例をいくつか資料 2 として挙げた（資料 2 参照）。

以下は、記録者として各クラスに入つて保育者と同様に観察記録を撮った主任のコメントである。

「観察したものをエピソードに落とすことで、時間の短縮が図れたような気がします。従来の園内研修は、皆で同じ保育を観察する時間を見つけるのが大変でした。この方法だと同じものを場面を共有したことにはなりませんが、ビデオで記録に撮ってきたものを一緒にみる作業よりはずっと容易に思えます。

それに、あんなに短いエピソードからあれだけ多くの課題や問題点が見えてきて、色んな角度からそのことを議論するシステムに驚きました。」（主任 T）

6. 一つのチームとして子ども達の育ちに責任を持つことの重要性：

「私はクラス担任ではありませんが、エピソードを他の先生方と一緒に読んで、今まで知らなかつたその子のことが前よりもっとよく理解できるようになりました」（クラス副担任 Y）

7. その他：

- 視覚的効果（実践を評価することの功罪：意識を明確にできる・実践を数字に置き換える抵抗感）

日本の保育には、実践の観察しそれを記録として残す伝統がある。これら記録は、子どもの成長や実践の軌跡を語る重要な資料（ドキュメンテーション）として扱われる。そして、その記録に基づいて、保育者は自分自身の実践を省察したり、子ども理解を促進させたりしている。しかしながら、これらの行為は園内研修にて口頭の話し合いで生まれることが多く、また、筆記された記録を面前において一定の手順に従つて分析・省察を行うことは少なく、まして記述記録を視覚的に捉える手法（例えば、5段階の数値化、◎○△などの記号化）で実践の評価を行うことは非常に稀である。としてそのまま用いられることが多い。

今回の日本版 SICS の実施後の意見交換会において、保育者達はこうして実践を視覚的に捉える功罪について、「子どものどの発達領域にもっと眼を向けるべきか、私はどうかわかった方がよかったのかなど、何を改善すればいいのかが一目瞭然でわかりやすい」（クラス担任 F）「ただ、はつきりと視覚化されることで、よい箇所はそれでいいと思うが、1 がついたら△がつたりすると私はダメなんだと必要以上に認識させられてしまうのは少し辛い感じがする」（クラス担任 M）と発言している。このように自分自身への省察と受け止めることが難しいと感じる保育者もいたということは、保育者は評価にさらされることに一抹の不安を抱くナイーブな存在であること、そして、その点に配慮してこの評価法が用

いられるべきであることが示唆されたと言える。また、従来の園内研修がいかに口頭での意見交換に終わってしまっていたかを保育者に気づかせたことも興味深い知見であった。

- 評価法というシステムの確立：

日本版 SICS では、エピソード記録という保育者自身の観察に基づく記録を『安心度』『夢中度』という評価観点から、ある一定の評価基準を用いて実践の過程を評価し、その結果を実践に返していく手立てまでを保育者に考えさせている。今回、この一連の評価法を園内研修として用いたことによって、システムに乗っ取って実践を分析という方法が、

- 保育者に子どもの発達を意識させ、子どもも理解を促進させる
- 保育者に自身の指導方法を振り返らせる

ことを可能にしたが、特筆すべき点は、

- 具体的にどのように実践に返していくのか、その手立てを保育者がプランとして書き上げることによって、明日の実践をより具体的に意識するようになった

という点であろう。

このように、ある一定の決まりによって分析するという行為は、これまでの園内研修や子ども理解、自身の保育実践を振り返らせただけでなく、保育者個々に明日の実践を向上させていく具体的な手立てを持たせ、そのことを明確に意識させた。また、園内研修という場で分析した情報を交換し合ったことによって、保育者各々の明日からの保育を互いに意識し見つめ合おうとする風潮が生まれたことも示唆された。

D. 結論

今回の日本版 SICS の実施によって、保育者は互いの保育実践の意図を確認し合うというというだけでなく、子ども理解の視点が保育実践にどのように影響を与えるのかを理解し、そしてそれらが明日からの保育で実際にどのように意識され工夫されていくのかを保育者が互いに見守り合う、という視点を得ることができた。今回、日本版 SICS の実施後の保育実践がどのように変化し、また、保育者の意識がどのように変革したのかまでは調査していない。従って、日本版 SICS によって保育の質が向上されたのかどうかを検証するためにも、継続的に実践に取り組む保育者の姿を追跡調査してみる必要性が示唆された。

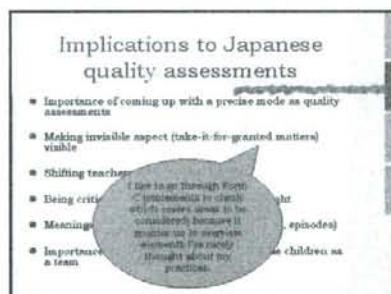
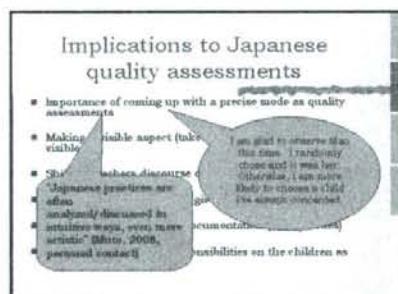
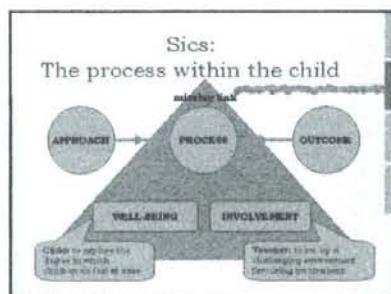
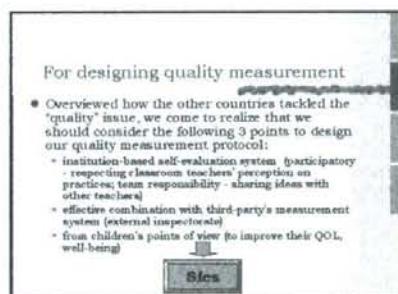
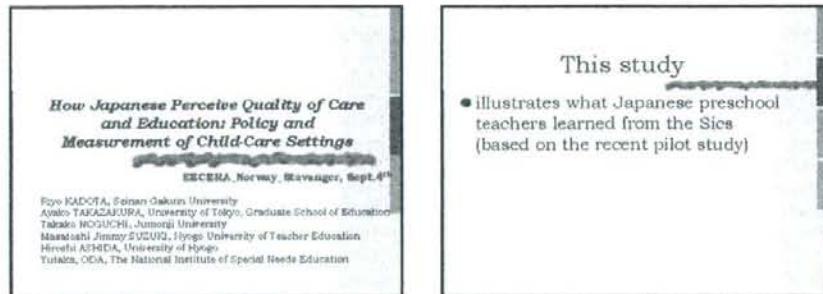
謝辞

今回の日本版 SICS の実施や研究調査に理解を示し、快く引き受けて下さった西南学院早緑子供の園の先生方、子ども達や保護者の皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

資料1：研究発表資料：2008年ヨーロッパ乳幼児教育学会（EECERA：European Early Childhood Education Research Association, Norway）

Kadota, R & et.al (EECERA, Norway)

Sept. 4, 2008



資料1 (続き)

Kadota, R & et.al (EECERA, Norway)

Sept. 4, 2008

- "We experience our own culture from the deepest levels toward the surface, and so our own culture can be largely invisible to us....When we look at another culture, however, we tend to see the surface first, and we may fail to probe toward the deeper well-springs of meaning. This, too, can cut us off and make culture and other people invisible" (Ayers, 2001, p.76)

Implications to Japanese quality assessments

- Importance of coming up with a precise mode as quality assessments
- Making invisible aspect (take-it-for-granted matters) visible
- Shifting teachers discourse differently
- Being critical and reflective gives a new insight
- Meanings/possibilities of documentation (i.e., episodes)
- Importance of sharing responsibilities on the children as a team

impacting teachers' discourse

- Japanese teachers are often talking about children's social development (e.g., how s/he relates to others; s/he cooperated well with others)
↓ through the lenses of the SICs
- discussing and predicting concretely how teachers can construct environments to foster children's activity

Implications to Japanese quality assessments

- Importance of coming up with a precise mode as quality assessments
- Making invisible aspect (take-it-for-granted matters) visible
- Shifting teachers discourse differently
- Being critical and reflective gives a new insight
- Meanings/possibilities of documentation (i.e., episodes)
- Importance of sharing responsibilities on the children as a team

Implications to Japanese quality assessments

- Importance of coming up with a precise mode as quality assessments
- Making invisible aspect (take-it-for-granted matters) visible
- Shifting teachers discourse differently
- Being critical and reflective gives a new insight
- Meanings/possibilities of documentation (i.e., episodes)
- Importance of sharing responsibilities on the children as a team

examples of observation notes

Name: Mai	Well-being	Involvement
Date: Aug. 14, 2008	4	4
By: Midori Imamura		
Episodes and its background:		
After coming back from the morning outdoor play time, she changed her clothes because the weather got hot. Due to the smaller number of children (during the summer recess), we put two classrooms together. From the morning, Mai has played well with Hana who teaches plays with Mai because they are in different classrooms.		
Then Mai and Hana have been playing together, and making various kinds of children's stories. Mai went for a cup of tea in the middle of drawing, however Mai kept drawing and sometimes looked at Hana. When she met her gate with Hana, they smiled one another. Mai kept drawing while she greeted Mai going to draw in play area. After finishing drawing seven pictures of flowers, stars, etc., she came to me and said "I give it to you." Then she went to the outside, play area where Mai played.		

資料1 (続き)

Kadota, R & et.al (EECERA, Norway)

Sept. 4, 2008

meanings of documentation

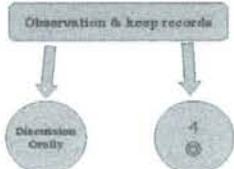
- What she (a teacher) has observed is transferred to the episode format, which allows us to save our time. When we have a on-site training session, we often encounter a difficulty to find a time for observation. All of us cannot observe at a time. It's easier than recording and watching videos.
- I am amazed by the fact that only a couple of episodes explore a lot of issues and enable us to discuss various aspects.

Implications to Japanese quality assessments

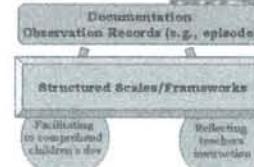
- Importance of coming up with a precise mode on quality assessments
- Making invisible visible
- Shifting the focus
- Being critical
- Meanings/potentialities of documentation (i.e., episodes)
- Importance of sharing responsibilities on the children as a team

Although I am not a classroom teacher, I came to know the children in episodes better than I used to do.

visual effect on documentation



Importance of providing structured framework



6 essential characteristics Laevers (2005)

- Respect for the child
- An 'open framework'-approach
- A rich environment
- The process of representation
- Communication, interaction, dialogue
- Observation, observation, observation

Thank you!

第1段階

活動中の子供の姿

資料2：保育者によるForm A（エピソード記録及びその評定）

Form A

子どもの名前: 記録者:	8月13日 10:30~11:20 (おひる寝からの覚かげ)		安心度 ○3	夢中度 ○3	エピソードとその背景 記録者:		
	8月13日 10:30~11:20 (おひる寝からの覚かげ)		安心度 ○3	夢中度 ○3			
エピソードとその背景 記録者:	このかわいらしい「ビーナス」が娘の好みのキャラクターで、いつも見ています。足元に「3歳」と書いてある。このかわいいと見てもらいたいのです。娘子は何かいふやうで、このかわいらしい「ビーナス」を娘の好みのキャラクターと見て、娘子も振り廻り、いいよいよ一匹まで見送り、最後ヨリズム次第、娘子も振り廻り、「わあ、うん、うん」と喜んで二つとも見ています。このまま娘子が二つとも見せられたあと、ちうとうまく運びこむことができました。自分がつかれておらず、娘子が二つとも見せてくれました。	安心度 ○3	夢中度 ○3	エピソードとその背景 記録者:	このかわいらしい「ビーナス」が娘の好みのキャラクターで、いつも見ています。足元に「3歳」と書いてある。同じく「3歳」という年齢の娘子を見た時、色が「色っぽい」といふ。小さくてかわいらしい娘子の絵を見て、色っぽい色が「色っぽい」といふ。小さい娘子を見て、娘子も娘の好みのキャラクターと見て、娘子も振り廻り、「わあ、うん、うん」と喜んで二つとも見せました。このまま娘子が二つとも見せられたあと、ちうとうまく運びこむことができました。自分がつかれておらず、娘子が二つとも見せてくれました。	安心度 ○4	夢中度 ○4
エピソードとその背景 記録者:	このかわいらしい「ビーナス」が娘の好みのキャラクターで、いつも見ています。足元に「3歳」と書いてある。このかわいいと見てもらいたいのです。娘子は何かいふやうで、このかわいらしい「ビーナス」を娘の好みのキャラクターと見て、娘子も振り廻り、いいよいよ一匹まで見送り、最後ヨリズム次第、娘子も振り廻り、「わあ、うん、うん」と喜んで二つとも見せました。このまま娘子が二つとも見せられたあと、ちうとうまく運びこむことができました。自分がつかれておらず、娘子が二つとも見せてくれました。	安心度 ○3	夢中度 ○3	エピソードとその背景 記録者:	このかわいらしい「ビーナス」が娘の好みのキャラクターで、いつも見ています。足元に「3歳」と書いてある。同じく「3歳」という年齢の娘子を見た時、色が「色っぽい」といふ。小さくてかわいらしい娘子の絵を見て、色っぽい色が「色っぽい」といふ。小さい娘子を見て、娘子も娘の好みのキャラクターと見て、娘子も振り廻り、「わあ、うん、うん」と喜んで二つとも見せました。このまま娘子が二つとも見せられたあと、ちうとうまく運びこむことができました。自分がつかれておらず、娘子が二つとも見せてくれました。	安心度 ○3	夢中度 ○3

厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）

分担研究報告

OECD諸国における保育の質と評価に関する動向

分担研究者 鈴木 正敏 兵庫教育大学学校教育研究科准教授

保育の質と評価については、日本のみならず世界各国の保育政策の課題となっている。それぞれの国において、質の高い保育をどれだけ提供できるか、そして質の向上を図るためにどのような評価システムが妥当であるか等について模索されている。そこで本研究では、OECDのStarting Strong (Early Childhood Education and Care) Networkで議論された、海外での保育の質と評価に関する動向について報告する。

A. 研究目的

本研究では、OECDのStarting Strong (Early Childhood Education and Care) Networkでの議論を踏まえ、海外での保育の質と評価に関する動向について分析を行い、日本における保育の質の向上に向けた研究への示唆を得ることを目的とする。

B. 研究方法

平成20年10月30日・31日にパリで開催されたOECDのStarting Strong Network会議での各国からの発表のうち、日本の保育政策に示唆を与える内容について分析を行った。

C. 研究結果

1・OECD諸国全体における保育の質と評価に関する動向

Simon Chapple氏によれば、OECDのDirectorate for Employment、Labour and Social Affairs (DELSA)による保育の質に関する政策的な動きをまとめた報告書が出されるようである。その内容は概ね以下の6点にまとめられる。それらは、1) OECD諸国における子どもたちのウェルビーイ

ングに関する比較、2) 社会が子どもにどれだけ投資をしているか、3) 3歳以下の子どもたちに対する政策がどのようにになっているか、4) 一人親による子どものウェルビーイングに対する影響の現状、5) 世代を超えた不平等の持続に関する知見、6) 政策に関するまとめ:どのように子どものウェルビーイングを向上させるか、である。

この中で、特に注目されているのが、子どものウェルビーイングをどのように保障しているかである。ウェルビーイングとは、子どもが栄養面や衛生面で充実した環境にあり、安心で心地よい状態に置かれていることである。その子どものウェルビーイングの状態を良いものに保つために常に子どもの様子をモニターし、国内的にも国際的にも深く可能な形で子どもたちの発達や伸びた領域を見いだすことができるようにしておくことが肝心であるとされている。

また、子どもに関する政策は基本的に彼らの未来に焦点を当てなければならぬこと、従って子どもへの予算は社会全体の投資として認識されるべきであり、その投資ポートフォリオをどのように改善して

いくかが課題となることなどが挙げられている。

こうしたポートフォリオを有効に活用するためには、政策決定に関する研究が将来的な政策に影響を及ぼすような形で行われることが求められる。そして、研究によって得られた保育に対する評価は、効果の無い予算を振替えて新たな枠組みを設定して再評価を行うため、また新規の政策への方向付けをするために、前向きに活用されるべきであると述べられた。

しかし、各国に見られるこれまでの一般的な予算の枠組みとしては、乳幼児ではなく、もっと後になってから措置されるものが多く、求めているような効果が得られないことが考えられる。それに対する方針として、もっと人生の早い段階での投資が必要とされる。具体的には、子どものライフサイクルの早い時期（ここでは出生前の時期からが想定されている）に前倒しで予算を割り当てていくことが提案されている。また、経済的・社会的・生得的に不利な状況にある子どもたちが持っているリスクに対する予算というものが必要であり、リスクの状況によって段階的に手厚く支援を行うシステムの構築が、各国の政策として求められる。

子どもたちへの早い時期における支援として、出生前の環境の整備や、出生後の母乳育児の支援、また経済的には出生前後の早い時期から家計収入を支え、その後は徐々に支援の度合いを減少させていくような形が考えられる。こうした出生前後の段階的なケアシステムの構築や幼児教育を重点的にターゲットとすることがこれからの方針の向かう方向であろうことが述べられている。

避けるべきこととしては、出生前後の初期の援助を過剰に医療に頼らないこと、すでに成功するであろうと予測ができる子どもたちに、遅い段階で予算的に支援すること、また一人親世帯に対して長期間補助金をつけることなどが挙げられている。また、留意して着目しておくべきこととして、アメリカにおいて実施されている二人親家庭を維持するための政策が子どもにどのような影響を及ぼしたか、あるいは世代を超えた不平等の継承がどのように行われていって、またどのように避けられるべきかを解明することが述べられた。

2・ニュージーランドにおける 保育の質と評価の特徴

ニュージーランドの教育は、学びの基礎の強化を謳い、全ての国民に21世紀に生きる市民としての知識・技術・価値観を身につけさせることを目標としている。そのためには、質の高い保育への子どもの参加の増加、小学校での英語・算数の成績の向上、学習障害の子どもたちの早期発見と介入、経済的その他の不利な環境から来る子どもたちへの配慮をしなくてはならないとしている。特に、不利な環境にある子どもたちや学習障害を持った子どもたちがもつギャップは、学校教育を受ける間に広がってしまうことを認識すべきであると主張している。

ニュージーランドでは、保育・教育が一体化されたシステムを取り入れてから20年以上が経過しており、その中で子どもの能力に応じたカリキュラム開発と、児童中心主義に立った教育学が供應している。また、幼児教育においては、形成的評価によって子どもの学びを見取り、伸ばしていく

のような実践が行われている。その評価のあり方は、子どもたちの学びのストーリーをポートフォリオ形式でドキュメンテーションすることによって、質的に見ていくこうとするものである。

子どもたちが小学校へ上がる時点では、1年生のリテラシーに関する指導基準があり、教師が彼らを教える際の手がかりとなっている。

保育・教育に関する政策については、実際に保育への投資が教育的効果の平等性を改善するように働いているか、ということが視点となっている。さらに、保育における学びの基礎づくりが評価されることで、質の高い保育へのより多くの投資の必要性を説明することができたり、各園の質の向上に向けて限られた資源を有効活用することができたり、また保育における学びの保障を公平に浸透させることができると考えられている。

そのためには、子どもたちに何ができるのかを正当に評価する方法を開発する必要がある。しかし、子ども一人ひとりのパフォーマンスを評価するということは、教師・保護者・子どもたち自身にとって大きな負担となる。それでも、テスト等による数量的で表面的な評価は比較的簡単に実施することができるのであるが、子どもの能力の変化をどのように深く評価するかという点においては、まだまだ困難な部分がある。そのような評価を可能にするためには、子どもの学びのプロセスを深く理解することが求められる。それを全ての子ども一人ひとりに行うのではなく、代表する子どものサンプルをとり、ケースごとに深く評価するような形がとられている。また、テストといったような量的な評価と、

子どもの真の学びの姿をとらえる質的な評価の両方を使うこと、保育の影響とその評価をすることができるよう、そこに影響を及ぼす外部的な要因についてのデータを収集することなどが議論されている。

その一つとして、「全国教育モニタリングプロジェクト」が1995年から4年生と8年生を対象として行われている。現在は、これらの試みを1年生と幼児教育段階にまで拡げるかどうかが検討されている。これらの評価は子どもたちへの一般的な影響を説明するものであって、この部門への予算的な措置を方向付けたり、保育の投資に関するメリットを検証したりする形では未だ行われていない。

子どもたちがどの程度教育に参加しているかについての出席記録や、後の学業成績については、全国学生番号を導入していくため把握がしやすい。特に出席記録の部分については電子化されている。この学生番号制度を、保育の段階の子どもたちへも拡大するかどうかは現在の懸案でもある。またさらに、教育や保育の成果の評価分析の結果を予算的・経済的なものへ拡げていく可能性を探っているところである。そして地域社会そのものが、質の高い保育へのさらなる投資をするような方向へ導いていくことが求められている。

データ収集に関しては、電子化されることで、その規模や正確さ、効率性に大きな変化が現れている。しかし、システムの変化そのものは、学びの豊かな理解に関する大きな変化とは結びついていないのが現状である。

質という点でも、教育全体においても、ニュージーランドの政策は教育の機会均等に対して大きな投資を行っている。その

中で、子どもの真の学びとは何であるかを追究しているようである。しかし、その根拠となるものを揃えるために、子どもの教育・健康に関する情報が、かなり集積されつつある。さらに個々の子どもを評価するにはコストがかかるため実現していないが、現有の学校基本情報の上に評価内容を積み上げていけると考えているようである。引いては、それが保育実践の評価につなげられるのではないだろうか。

最後に課題として、今後は児童中心主義に立ちながら、教育制度そのものに焦点をおいた学びの評価がなされなければならないということが挙げられた。

3・カナダ・マニトバ州における 保育の質と評価の特徴

カナダの中部、アメリカとの国境に接するマニトバ州では、包括的な幼児教育システムの開発に取り組んでいる。目指すところとしては、1) 公的資金で運営されるものであること、2) 実証的研究による根拠に基づいたものであること、3) 全児童を対象としたもの・対象を限定したもの・医療臨床的なものという多層レベルで考えられ、ニーズのある子どもたち全てに手を差し伸べられるような政策であること、4) リスクを最小限にしておくこと、5) 子どもの発達を守るようなものであること、6) 子どもに対する予算・活動・方針決定・成果について各部署が連携して検証を行うこと、などが挙げられている。

この政策については、コストやリスクにもかかわらず、政策的な強い意志(courage)があること、社会から評価を求めるプレッシャーがあること

(understanding)、評価の方法やそれに関する知識の交流のための資源(resources)があること、政府に対しては変化を促すような内的な力を、また地域社会に対しては証拠を提示し変化を評価するような力を吹き込むこと(empowerment)が求められている。

そこで「マニトバ州の健康な子ども(Healthy Child Manitoba)」を実現するための部署を超えた構造を作り、「研究」→「政策」→「実践」→「評価」のサイクルを稼働させることで改善を図り、知識と実践の循環を目指している。研究の面では、データ収集に力を注いでおり、全戸訪問による新生児スクリーニングに始まり、幼稚園での子どもの評価(Early Development Instrument)、全国の児童生徒を対象とした縦断研究(National Longitudinal Study of Children and Youth)、マニトバ州独自の縦断研究(Manitoba Longitudinal Study of Children and Youth)などを行っている。さらに、データは教育・保健・他の社会福祉サービス等の部署を超えて共有されている。出生前後に子育て支援を行うプログラムや、直接家庭訪問を行うプログラムがあり、「総合的な子どもの発達に関する情報システム」を構築している。家庭へのサービスや家での保育・病院・医者・薬局・予防接種・高齢者施設・それらに対するコストなどの資料の他、「マニトバ州の健康な子ども」プログラムのデータ、国勢調査や縦断研究の調査結果などが統合され、地域の住民単位での調査研究データベース(レジストリ)が出来上がっている。

こうした膨大なデータをもとに、実証的な研究を行い、部署を超えた形で予算が組めるように計画がされている。また子どものデータや保護者アンケートのデータ、全国の児童生徒のデータを用いて、保護者の子育て支援を行ったり、州全体で出生前後から5歳までの子どもの養育を肯定的なものにするようするプログラム（Positive Parenting Program）が推進されたりしている。これらのデータが、州レベルで保育・教育の双方の部署で地域の優先的課題や連携活動、政策決定に影響している。

4・ポルトガルにおける

保育の質と評価の特徴

ポルトガルでは、1997年に幼児教育カリキュラムガイドラインが出されてから8年が経過した2005-2006年度に、プレスクールでの保育の質を評価するための調査が行われた。教育省が主導した3つの調査研究は以下の通りである。

- 1) 幼児教育におけるカリキュラム開発について（保育研究の専門家による報告）
- 2) 幼児教育におけるカリキュラム開発に対する指導監督のあり方について（ガイドラインについての知識と応用についての大規模調査）
- 3) カリキュラム開発の指導に関する幼稚園【キンダーガーテン】のネットワークによる支援について（ケーススタディ）

このうち、ガイドラインの知識と応用については、ほとんどの保育者が知識をもって応用していることが明らかとなった。子どもの評価については、観察によるものや子どもの作品等で判断することがほとんどの保育者によってされている。しかし、

ポートフォリオやチェックリスト、レーディングスケールなどを用いるのは年1～3回程度までの頻度を考えると7割近くの保育者が行っているものの、頻繁に行っているのは1～3割程度にとどまる。標準テストは通常ほとんど使われておらず、年数回にわたるのが2割程度、頻繁に行っているのは数パーセントにも満たない。教育環境を評価する際には、9割程度が子どもの夢中度を測ることで行われており、チェックリストを使用するのが7割、環境スケールが4割、第三者評価によるものが2割弱となっている。

子どもの評価については、研修が必要とする意見と評価方法に関する情報提供を求める意見がそれぞれ8割を超えており、保育者の中にニーズが高まっていることが分かる。保護者とのかかわりや他機関との連携についても、研修が必要であると訴える保育者が8～9割にのぼっている。保護者への子育て支援や地域との連携についても、意識の高まりがあることが窺える。

他に、小学校との接続・連携については、17%が小学校との交流活動を積極的に実施している。また就学に関する説明会等を保護者向けに行っているのが15.9%、保育者と小学校教師、保護者が一体となって移行期の交流・連携の計画を立てているのが9.4%と、小学校教育への接続連携が徐々に浸透しつつあることが示された。OECDの幼児教育ネットワーク会議がポルトガルで開催された際にも、中学校を核とし、学区内の小学校・保育施設が一体となって連携を推進している実例も紹介されており、こうした動きが保育の質を高める上でも重要な課題と認識されていることが分かる。

さらに、ベルギーのSICSの考え方を基本として英国その他で実施されている「効果的な幼児の学びについてのプロジェクト（Project Effective Early Learning）」が進行しており、子どもの学びを効果的に評価しながらその質を高めていくことが考えられている。その中には外部からの支援に支えられ、妥当性を認められるような保育の自己評価のあり方が模索されており、今後の進展が期待される。

D. 結論：保育の質と評価に関する

今後の方向性について

OECD諸国における保育の質に関する議論には、以下の三点に主な関心がもたれていた。一つは、質に関して子どもの学びが重視されていることである。これは小学校以上の教育で行われているような学習という意味での学びではなく、その基礎となる体験や学習の芽生えとしての彼らの活動を指している。

二つ目には保育・教育機関の説明責任が問われていることである。保育の質、特に子どもの学びがどのように活動の中に現れているかを、保護者や地域に説明できるようになることが求められている。政策決定の段階において、予算を配分する根拠となる証拠が必要となってくる。どれだけデータを揃えておくかが、保育の質の向上に対し予算を計上するための方略に影響している。しかし、ここにはOECDなどが行っている国際学力比較テストの結果等が、国が保育に求めるものに影響を及ぼしていることも看過できない。しかし、こうした地域や社会の要求に応えられるようにすることが今後の保育政策の課題である。

三点目は、政府機関やその他の機構による長期的な縦断研究の必要性である。上記に挙げた説明責任に関連して、長期にわたる保育の効果を実証するため、子どもたちの背景情報やパフォーマンスを集積していくことが目指すべき方向として一致しているように思われる。またこれまで散逸していたデータを集約することによって、データ間に有機的なつながりを見いだすことができ、早期の介入を可能とするであろうことが予測されている。

以上のことから、保育の質を向上するために、子どもの学びや活動に没頭する度合いを明らかにし、それをデータとして集積することが重要であることが明らかとなった。今後は、その実現のための研究・連携の体制を整えていくことが求められるであろう。

(本論の内容は、2008年10月30・31日にパリで行われたOECDのStarting Strong (Early Childhood Education and Care) Network会議において各国・機関から発表されたものに基づいて筆者がまとめたものである。)

厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）

分担研究報告

アメリカ合衆国における保育の質の捉え方及び研究の動向

分担研究者 門田 理世 西南学院大学人間科学部准教授

本研究では、アメリカの就学前教育において保育の質がどのように捉えられ議論されているのか、まずその動向について概説する。その際、保育の質を評価する意義をどのように捉えているのか、また、保育の質評価ツール及び評価ツールを用いた研究報告からアメリカの幼児教育界が捉える保育の質の定義を抽出する。最後に、アメリカの研究動向が示唆する今後の日本における保育の質研究における方向性について一考察を試みる。

A. 研究目的

本研究では、アメリカの幼児教育界が保育の質を評価する意義をどのように捉えているのか、また、保育の質をどのように定義しているのかを概観し、日本の保育の質研究に与える示唆を見いだすこととする。

B. 研究方法

評価ツール（ECERS-R、CLASSなど）を用いて保育の質を検証している研究論文を中心に、保育の質評価の意義及びその定義について分類分析を行う。

C. 研究結果

保育の質を評価する意義を、社会的投資としての幼児教育、4歳児を就学前教育の準備段階として学校教育制度に組み入れようとする教育システムの変化、そして乳幼児発達理論を実践に反映させる必要性に見いだしているようである。また、保育の質を定義する統一見解はないが、施設の特徴、実践に見られる要素、養成課程における指標などに着目した研究報告が見られた。

特徴的なことは、それらの研究では評価ツールとして ECERS-R 及び CLASS が例外なく用いられていたことである。これら 2 つの評価ツールに加えて独自のアンケート調査や別の指標を取り入れて研究がなされており、保育の質研究を行う方法としてこの 2 つの評価ツールの認知が高まっていることが示唆された。以下、詳しく列記する。

質を評価する意義についての捉え

近年、全米各地で幼児教育への関心が高まりを見せている。州を挙げて学力調査や教育の質を検証する研究調査を実施し、そのデータに基づいた施策が実行するなど活発でユニークな支援策が全米の州や市のあちらこちらで見受けられる。本節では、これら幼児教育に関する意識が高まっていく背景を保育の質を評価することの意義という観点から概説してみたい。

1. 社会的投資としての幼児教育

2005 年、アメリカ教育学会 (AERA ; American Educational Research Association) は、『質向上への投資が成功

の鍵となる幼児教育』と題したコラムを掲載し、教育研究者団体として州の行政政府機関に対して以下の4つの提言を行った。

1. 最も社会的支援を必要とする子ども達が質の高い幼児教育を受けられるような制度を確立すること
(長期的には、この公的投資がより高い配当として返ってくる)
2. 幼児教育に関するスタンダードを策定すること (特に、子ども達の発達段階を踏まえた豊かなカリキュラムを作り上げる)
3. 就学前教育に携わる保育者への教育及び財政的支援を行うこと (4年制大学で専門的知識を養い、給与を向上させる)
4. 質の高い保育が提供されているかどうかを監督すること

この提言がなされた背景には、5歳以下の子ども達の約6割 (2005年当時) が自宅外において保育・教育されているという社会実状に着目した全米各州の州政府が、教育政策の一環として就学前教育 (5歳児以下への幼児教育施設や機関) への公的支援を拡大している現状があった。アメリカ教育学会は、各州政府が幼児教育への関心を高めている現状に対し、これまでの研究成果に基づいてその支援の方向性を示唆した。例えば、幼児教育を社会への投資という観点から捉え直す根拠として、1960年代にピアジェ理論を基に作成されたハイスコープカリキュラムを取り上げ、その40年以上にも及ぶ縦断的研究の成果として、このハイスコープカリキュラムを導入した就学前教育で保育を受けた子ども達が、小学校以降の学業を向上させたばかりでなく、地域社会の一員としての責務を果たし、社会的に

も成功を収めた研究事例 (Weikart, 1989; Schuweinhart & Weikart, 1997) を取り上げている。また、経済的視点からこの教育効果を分析した結果に基づいて、質の高い教育実践 (豊かな言語力を駆使した子どもの発達に適した教育；高い専門性を持った教員集団；少人数制のクラス編成) の提供は、長期的に見て有効な投資に当たる (1ドルの投資で3ドルから17ドルの収益をあげる。社会的不利益を被っている子ども達への投資ほど高収益をあげる) と示唆する研究事例 (Heckman & Masterov, 2004) も提示している。教育実践を投資の対象という視点から行政政府を説得するためには、ハイスコープのような縦断的データによる裏付けが必要になってくることも示唆されている。

更に、オクラホマ州が、4歳児保育の無償化を実施し、併せて保育士の給与を公立の学校教諭と同等に引き上げたことによって、保育の質が飛躍的に高まった事例 (NICHD, 2002) を用いて、保育士の社会的地位の向上と保育士の再教育及び教育レベルの強化を提言している。

2. 就学前教育システムの変化

幼児教育への関心を示す国家レベルの教育施策としては、ブッシュ政権下 (2000-2008) で実施された“Early Reading First”と呼ばれるプログラムが挙げられる。“Early Reading First”では、読むことをどのように効率的に幼児期に指導し、サポートしていくかに主眼がおかれていく。また、コネティカット州のハートフォード市においては、市長自らがその管轄下に幼児教育局を設置して保育の質向上のためのプロジェクトを立ち上げるなど、主たる教育

政策の一つとして幼児教育を位置づけようとするケースが多く見られる (Pianta, 2007; Zaslow, M. & Martinez-Beck, 2005)。

教育制度において着目すべきは、4歳児保育の取り扱いについてである。表1は2005年度において4歳児がどのような保育を受けていたのか、その形態とその割合を示したものである。主流はセンターと呼ばれる集団で保育を提供する施設 (child care center, family day care center, co-op centerなど設置者の違いによって名称は様々) で全体の57.5%を占めている。その割合は年々増加の一歩をたどっており各州政府も本腰を入れて、教育制度の改革に取りかかっている。その例として、州政府レベルの対策としては、オクラホマ州の4歳児保育の無償化 (2002年)、ヴァージニア州全土でプレキンダーガーデン (4歳児教育) の導入 (2007年) など、4歳児保育を幼稚園への就学準備段階とみなしてプレキンダーガーデン (4歳児保育) を幼児教育制度の一環として設置する動きが活発である。この動きは、脳科学分野の研究報告によって早期に学習指導の素地を入れることが就学後の学力向上に寄与することが検証され (National Research Council, 2001)、その見地からの幼児教育強化の重要性が認識されたことによる。つまり、『保育の質の向上=学力向上の礎』の原理によって教育システムの改変がなされていると言える。

表1. Percentage distribution of the early education and child care arrangements of the 2001 birth cohort at about 4 years old, by type of arrangement and selected child and family characteristics: School year 2005-06

type of arrangement and selected child and family characteristics	
No regular non-parental arrangement	100.0
Home-based care	20.0
Center-based	20.7
Multiple -arrangements	57.5
	1.9

<http://nces.ed.gov/programs/coe/2008/se ction1/table.asp?tableID=857>

3. 乳幼児の発達理論への回帰

保育実践の質を向上させるには実践者の質を向上させることが必須条件となる。全米教員養成・教育認証協議会 (NCATE : National Council for Accreditation of Teacher Education) は、2008年現在、毎年全米に輩出される新任教師の3分の2を送り出す約650の教員養成課程をその基準に見合ったものとして認定している非営利の教育団体である。そのNCATEは昨年、実践者の乳幼児及び児童発達理論に対する理解を向上させる必要性を挙げ、その教員養成課程基準の見直しを図った(2008)。特に、教員養成の課程において、発達理論と教育実践の結びつきに対する理解を促進させることを提唱している。その理由として、教師の教科理解への充実が必須要件として挙げられる一方で、幼児理解につながる発達理論への理解が低下傾向にあることを挙げており、更に、発達理論の授業を提供する教授陣が、心理学もしくは人間発達学の理論の専門家であり、それを教育及び保育の文脈の中でどのように作用するのかを実践的見地から指導できる専門家ではないことも問題点として指摘している。

子ども達の生育歴や人種・言葉・文化規

範の違いなどから派生する発達の違いを理解することが、その子ども達に見合ったカリキュラムデザインへと繋がり、ひいては、質の高い教育・保育内容を提供することにつながると NCATE は結論づけている。

4. NAEYC の基本見解 : Knowledge-driven として捉える保育の質

全米乳幼児教育協会 (NAEYC : National Association for the Education of Young Children) の基本見解 (Position Statement, 2009) と発達にふさわしい保育実践 (DAP: Developmentally Appropriate Practice) の概要 (粗訳) を載せる。

NAEYC 基本見解 : 2009 の概要 (粗訳 : 門田理世)

近年の課題

- ・ 乳児期の保育サポートが足りない。
- ・ 多文化の子ども達の増加。言葉・家庭文化と学校文化の違い。
- ・ 特別支援を必要とする子ども達の増加。
- ・ 教師への負荷 : 質を上げるためにの負荷。財政的措置が低くなつたことによる、特に child care 分野におけるスタッフの不足。
- ・ 貧困層の増加。
- ・ 過去 20 年間で最も深刻な問題が英語を母語としない子ども達の増加率。
- ・ 幼児教育の重要性に対する行政関係者や公的な認識が得られるようになってきた。

↓この基本見解では以下の 3 点を焦点化する

1. 学習のギャップを縮める。全ての子ども達の学力を上げる。

2. プレスクールと小学校教育との接続をよりよく進展させる
3. 教師の知識や意志決定力が教育効果を上げる必須事項であることを認識する

学習のギャップを縮める。全ての子ども達の学力を上げる

- ・ 幼稚園で、貧困層の子ども達の認知力は裕福層と比較して 60%低い結果が出た。
- ・ マスでは、黒人層が 21%、ヒスパニック層が白人より 19%低い結果が出た。
- ・ アメリカの子ども達の世界的な学力水準が低かった。

↓

NCBL : 2001 では、学校別に出された子ども達の成績を社会層別・人種別・特別支援別・英語と母語としない別に分けて報告書が出された。この個別に分けて出されたレポートのお陰で、子ども達のそれぞれが置かれている現状を抜きにして、全ての子どもが同じような学力を身につけていく支援を行うことが学校の責任として明示された。

↓その結果、

子ども達、教師、学校は、カリキュラムが狭義な解釈のもとで作成され、テストの実施と結果ばかりが重視され、間違った方向性に動いているという批判が出ている。しかし、方法はどうであれ、子ども達の学びの質を向上させるという目的は社会にも広く共有されており、その点において教育関係者はこの将来的に生じるギャップを埋めるための手立てを幼児教育期に打たなければならない状況に追い込まれている。

2007 年現在、全米の 4 分の 3 にあたる州が幼児期（幼稚園以前）の学びのスタンダード

ドを策定している。ヘッドスタートは“child outcome framework (成果表)”の中で8つの領域において望まれる成果について挙げている。

↓ NAEYC は、こ質の高い幼児期における学びの水準、カリキュラム、評価の定義付けをする。

プレスクールと小学校教育との接続をよりよく進展させる

幼児教育への重要性がこれまでの幼小の伝統的ギャップを埋めるきっかけとなつた。

小学校3年生に課せられる全国一斉テストのせいで、k-2へのプレッシャーが小学校でかなり厳しくなってきた。この一因として、100万人以上の3・4歳児のために投じられた州立のプレキンダーガーテンの存在がある。ヘッドスタートや保育所に通う何百万にも上る3・4歳児の子ども達にもこの州からの予算が回るということもあって、現在全米で約90万人を抱えている政府直轄のプログラムであるヘッドスタートは州レベルの公立学校と歩調を合わせながら保育を行っていくことが求められている。タイトルIの予算は30万人の子ども達に使われており、現在全米の4歳児の約35%が公立のプレキンダーガーテンに通っている。

プレスクールと小学校の連携を主唱する人たちは、プレスクール保育者の質の向上もねらえるとして4歳児、更には3歳児を公立学校のシステムに組み入れようとする動きもある(K-12システムから PreK-12システムへ)。と同時に、現在 K-3 に見られる学力指向の動きが、3・4歳へも降りてこないかと懸念されている。『幼児期の教育における学びの水準』(Early Learning

Standards) と呼ばれる指標は、2002年にされた Good Start や Grow Smart (言葉、リタラシー、数概念の領域についてのみ水準が示された) として認識されているが、この領域だけを取り上げて子どもの学びを強化しようとする州では幼児期におけるカリキュラムの狭義化が進んでいる。

統一された水準が掲げられていないために、州ごとの取り組みはまちまちである。それら全州の取り組みを網羅したカリキュラムが出版されたことで、全ての領域を実践に移そうとして結局表面的な実施に終わってしまっているという現実がある（子ども達の学びが広く浅くなってしまっている）。

幼児期における学びの水準が提示されたことで、プレスクール及び K-3 の教師や子ども達が厳しい状況に置かれている（一斉授業・断片的な保育内容・全く余裕のないスケジュール）。特に、問題解決や豊かな遊び、仲間作りや情緒・社会性の発達、身体活動、表現活動など、幼児期の学びに不可欠な経験がそがれている。

プレスクールと小学校教育との連携は、これらの諸問題を解決するためであって小学校教育に照準を合わせ、準備していくためのものではない。

教師の専門知識や意志決定能力が教育効果の生命線であることを認識する

幼児教育に対する認識の高まりは歓迎すべきことである反面、幼児教育に対する専門知識を持たない政治家や行政官からは、即効性を持った教材やツールの開発こそが支援策であるとされ、保育者の持っている専門的知識は用いられず、保育者は指定されたカリキュラムを使うだけの人となり、実践の自由は妨げられている。

保育者の主体性が保育実践の鍵を握って

いることは言うに及ばない。これを軽視しない理解を他に求めていかなければならぬ。同時に、保育者各人が果たして確固とした主体性を携えた実践知・専門知を有しているのかを確認し、保育者の知識向上につとめなければならない。また、保育者養成と現職者教育が一貫するシステムを作り上げることも保育者の質の向上に寄与すると考えられる。

発達にふさわしい保育実践を考えるにあたって

意志決定を行う際に必要な知識として

1. 子どもの発達と学びについての知識：年齢に伴う発達の流れを理解することで、どのような経験が子どもの発達や学びを一番促進するかについて理解する
2. 子ども達ひとり一人に対する知識：子ども達ひとり一人にとっての最良の学び方や個々の子ども達の違いに対応していく
3. 子ども達の社会的・文化的背景への知識：学校での学びが家庭や地域社会のものとつながっていく意味深いものにするために、子ども達が育つ家庭や地域社会がもつ価値観、子ども観、身体・言語に表出する多様性について造詣を深める

子どもの発達や学びの原理が支える実践

DAPとは子ども達の発達や学びへの推測や願いを示したものではなく、理論や研究成果を基にして支えられた実践である。ここに挙げる12の原理は順番に意味があるわけではない。このリストは包括的なものであるが、勿論、全てが網羅されていなければ意味がないというものでもない。

1. 身体的・社会的・情緒的・認知的な領域における発達と学びは全て大切であり、これらは相互に関わり合っている。ある一つの領域の発達と学びは他の領域にも影響を与える。
2. 子ども達の学びや発達には、既に培った能力や技能、知識の上に新しいものが育つという一連の流れがある。
3. 発達や学びは子ども達ひとり一人によって速度が違うのと同じく、ひとりの子どもの中にも領域によって発達と学びの速度が違う。
4. 成熟度と経験が機能的に継続して関わり合うことで発達と学びを遂げていく。
5. 早期における経験は、それが早すぎても遅すぎても、子ども達の発達や学びに多大な影響を与える。発達や学びを確かなものにする最適な時期（臨界期）がある。
6. 発達は、より複雑さを増し、自己制御や象徴的なもしくは具象的な能力を培うようになっていく。
7. 子ども達は、向き合ってくれる大人との関係や友達と仲良く関わり合うといった安定した状態の時に最も発達を遂げる。
8. 発達や学びは多様な社会・文化的要素の中で派生し、影響し合う。
9. 常に意識の活発な状態で周りの環境を理解することで子ども達は様々な学びを獲得する。保育者の多彩な指導法とかかわりが、子ども達の学びを支援する。
10. 遊びは、子ども達の自己制御能力を培うと共に、言語、認知、社会性の発達にも大切な要素である。
11. 発達と学びは、子ども達が現在できることよりも少し難しいことに挑戦

していくこと、そして新たに獲得したことを何度も練習することで躍進を遂げる。

1.2. 経験が、持続性、問題解決への取り組み、柔軟性といった子ども達の学びに対するやる気や取り組み方を形作っていく。そして、こうして形成された気質や行動が更なる学びや発達に影響を与えていく。

発達にふさわしい保育実践を実施するにあたって（ガイドライン）

以下に示すガイドラインは、幼児教育に関わる者が意志決定を下す際に考慮すべき5つの主たる領域を挙げたものである。

1. 学び手（子ども達）を気遣う地域社会の構築
2. 子ども達の発達や学びを助長する指導
3. 大切な保育目標を達成するためのカリキュラム作成
4. 子ども達の発達や学びを評価
5. 家庭と一緒に子どもの成長を支え合う関係性の確立

今回の改定の最も大きな特徴の一つは、DAP が Knowledge base の実践であるという NAEYC の視点であろう。1986年に DAP が発表されて以来、様々な研究がなされてきた。今回定番では、DAP はそれらの研究結果を基に提示されていることが繰り返し強調されている。このメッセージは、今回の基本見解の柱と言える小学校教育との連携を意識したものと推察できる。幼児教育を過小評価する傾向は、未だアメリカ社会に見られ、そのイメージを払拭するためにも、最新の研究結果や動向を踏まえて幼児教育理論の枠組みを提示する必要があったと考えられる。「小学校教育の準備のために連携をするのではない」と本文でも明言されてい

るよう、NAEYC はこれまで提唱してきた幼児教育の独自性を保ち、学力向上のみを目標とした指導内容の導入への警鐘をならしている。同時に、就学後の子ども達の間に見られる学力差が幼児期における学びの差であるという研究結果を盾に、単に功利的で即効性のあるカリキュラムを押しつけられる危険性を回避しようと、子ども達の発達や学びがいかに総合的に理解されるべきか、遊びという活動内容がいかに子ども達の発達や学びを助長するものか、そして、実践内容や指導のあり方を誰よりも熱心に考え、子ども達のことを理解している保育者の指導者としての裁量権を奪うようなカリキュラムの押しつけやこそが子どもの発達や学びの最大の妨げになることを理論を持って説明している。これは、研究者が中心となった専門家集団だからこそ成し得た成果だと評価すべきではないだろうか。

保育の質の定義：保育の質評価ツール及び評価ツールを用いた研究報告から

保育の質は、色々な側面から議論されてきているが、本節では、近年発表された研究報告を基に、アメリカ幼児教育界が、特に4歳児保育の質をどのように定義づけしようとしているのかについて概観することにする。

1. プレキンダーガーテン（主に4歳児保育）における保育の質

Pianta, et.al., (2005) は、幼稚園就学への準備段階として着目されているプレキンダーガーテンにおいて、ECERS-R、自身の研究チームが開発した CLASS、そして Emerging Academic Snapshot (Ritchie, Howes, Kraft-Sayre, & Weiser, 2001) を